

白川先生の「興」研究と『杜律虞註』の「興」説について

魯 耀 翰
金 子 祐 樹 譯

はじめに

『杜律虞註』は律註の代表的なテキストで、儒學者の虞集（字は伯生）が杜詩のうち七言律詩一五〇篇あまりを選別し、朱熹の『詩集傳』を模して註釋を施したものである。「杜工部七言律詩註」「虞邵菴分類杜詩註」「杜律邵菴註」「杜律訓解」とも呼ばれ、簡単に「虞註」ともされる¹⁾。虞集は、高麗の忠宣王が燕京に萬卷堂を開設して李齊賢を呼び寄せ姚燾・閻復・趙孟頫といった當代の名儒と從遊した際、これに同行した人物でもある。

ところで、『杜律虞註』の原著者については虞集でないという説がかねてより存在する。朝鮮の成文濬（一五五九—一六二六）は、嘉靖年間に太原守であった濟南の黃臣と、山西監察御使だった浮山の穆相によって重刊された『杜律虞註』を讀んだ後に一六一四年（光海君六、萬曆四十二）に作成した「書杜律虞註後」で黃臣の跋文を引用して、この書はもともと元の張性の『杜工部律詩演義』であったことを論じ

ている。張性は杜詩に註釋を付したものの生前に刊行の日の目を見ず、早逝するやこれを惜しむ同地の人士が協力してその遺稿が刊行された²⁾。ところが、當時の刊本は広く流布しなかつたらしく、朱熊が同書を手し再刊するうちに、虞集の名に假託して書名も『杜律虞註』に變わつたとする³⁾。

『杜律虞註』の複数の序文の作成者らは、杜詩と『杜律虞註』を以て下のように評價している。

- 1) 杜詩には『詩經』の遺音が残っている。
- 2) 虞集は『詩集傳』を模して杜詩に註釋を付した。
- 3) 『詩經』の涵意が朱熹によって遺漏なく發揮されたように、杜詩の本意は虞集によって遺漏なく解釋された。

また、註釋は、杜詩の本意を「忠君愛國之心」と「忠君愛親之情」に求めた。本稿では、以上の評價を念頭に置きつつ、『杜律虞註』が

杜詩の註解書として備えている特徴について簡単にだが論じてみたい。

1. 清州覆刻本『杜律虞註』の概要

陽士奇と胡濙の序文によると、『杜律虞註』はもともと刻本が無かったけれども、江陰の朱善慶が單陽元の『讀杜愚得』を刊行したのち、その息子の朱熊が同書を得て父の朱善慶に懇願して一四三四(宣徳九)年に刊行したらしい。一四四三(正統八)年には林靖が校正、石璞が刻した重刻本が出された。『杜律虞註』の明版本は相當多く、宣徳年間の朱熊刻本・正統年間の石璞刻本・正徳三(一五〇八)年刻本・嘉靖三(一五二四)年の張祐刻本・嘉靖九(一五三〇)年の穆浮山刻本・嘉靖間刻本(『杜工部七言律詩』・嘉靖二十六(一五四七)年の退省堂刻本・萬曆五(一五七七)年の桐花館刻本・萬曆年間の吳登藉刊本、といったものが確認されており、他にも坊刻本がかなり多い。また、趙訪の五言律註と合刻したものもある⁴⁾。

韓國の嘉泉博物館には「成化六年庚寅(一四七〇)春正月日忠清道清州牧刊行」の刊記を有する木板覆刻本『杜律虞註』(寶物第一二〇九號)が傳わる。この清州覆刻本は、一四四三年に刊行された石璞の重刻本を底本に、一四七〇年に覆刻したもので、『杜律虞註』が流布するや、たちまち覆刻されることとなった。同書の形状は次のとおりである。

上下黒口内尙黒魚尾・27・2×16・8cm.

清州覆刻本『杜律虞註』には、卷首に陽士奇の「杜律虞註序」・陽榮の「杜律虞註序」・胡濙の「杜律虞註序」・黃淮の「杜律虞註後序」・林靖「書杜律虞註序後」といった序文が収録されている。序文の後に「杜詩七言律目錄」が續く。その後、本文首行の「杜工部七言律詩」・低五格の「虞集伯生註」、次行に低一格をもって分類目「紀行」となっている。第三行には低三格をもって詩題「恨別」。第四行以下に平頭から詩本文が後續する。虞集の註釋は、詩本文の次に低一格をもって収録し、註釋は圈内註と圏外註に分かれる。中縫には頁次のみを記録し、書名・卷次の記載は無い。

清州覆刻本刊行の経緯は、本文に後續する金紐の跋文に詳しい。すなわち、相國の具致寛が忠清都事の尹師夏に『杜律虞註』を與えて録梓するよう請うた。尹師夏は監司の安哲孫にこのことを傳え、清州牧使の權至に委嘱したものの、板刻が完遂する前に安は異動させられる。新たな監司の金良瓚が着任し、事がほぼ成ったとき、尹師夏も任期が終わり戻ってきた。版刻を完遂するや、權牧使は尹師夏に手紙を送って事の成就を傳え、跋文を求める。尹師夏は自身が適任者でないとして跋文作成を金紐に依頼した。跋文は、成化七年(朝鮮成宗二、一四七一年)の孟秋に作成された⁵⁾。

木版本・不分卷・一册・四周雙邊22・2×13・5cm、有界、10行20字、

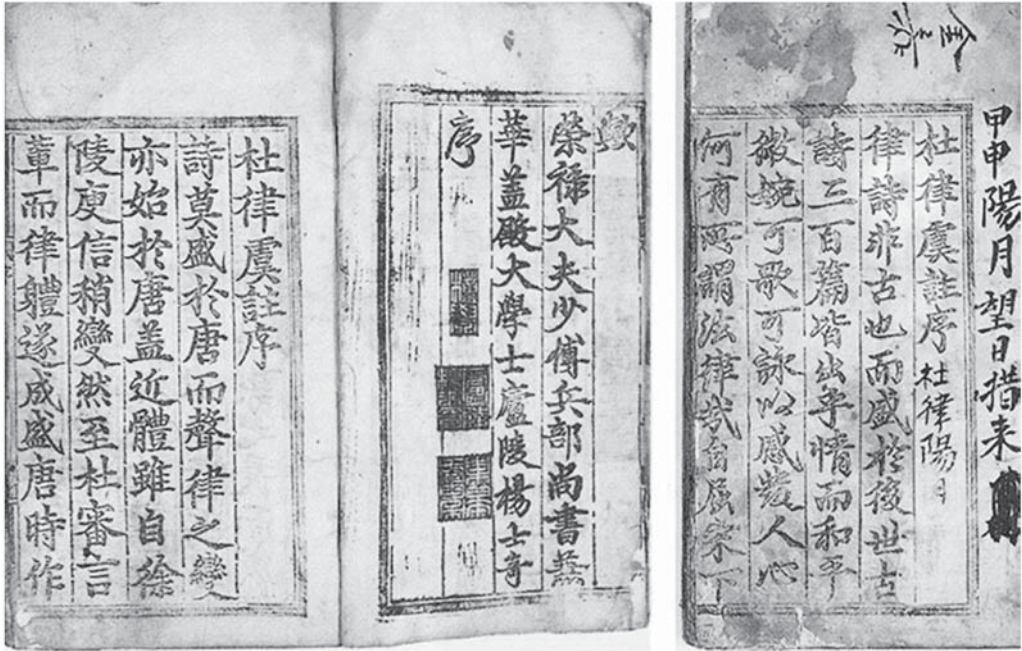


圖1 嘉泉博物館所藏『杜律虞註』、陽士奇序（右・中）と陽榮序（左）

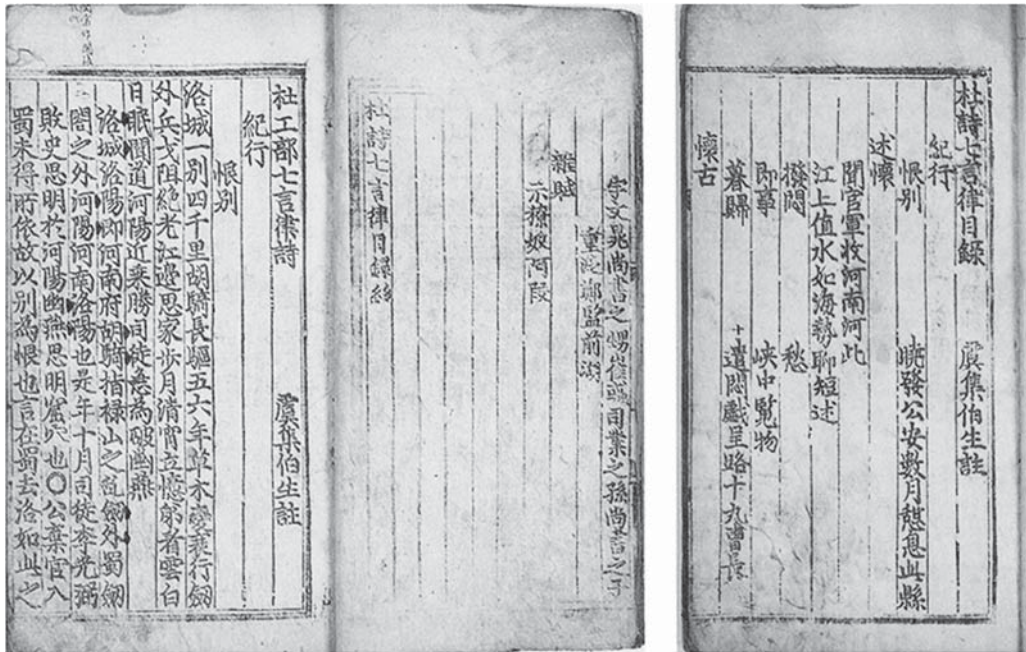


圖2 嘉泉博物館所藏『杜律虞註』、目錄（右）と卷首（左）



圖3 嘉泉博物館所藏『杜律虞註』、金紐跋文(右)と刊記(左)

この清州覆刻本は、金紐の跋文に續いて末葉に「成化六年庚寅春正月日忠清道清州牧刊行」の刊記がある。刊行時期が成化六年(一四七〇)春正月となっており、跋文は板刻を終えた後に作成されたと分かる。この一行あとに再び一行を割いて列衛八行を以下のとおり列記した。

- 刻手韓叔孫等十人
- 校正成均幼學李經邦
 - 監校中直大夫前長湍郡守蔡申錫
 - 書中直大夫行槐山郡守朴秉德
 - 行判官朝散大夫宋遙年
 - 牧使通訓大夫權至
 - 行都事通訓大夫金克愷
 - 守觀察使通政大夫金良墩

本文の校正に參與した成均幼學の李經邦は、一四五五(端宗三、景泰六)年に孝行で敍任された人物^⑤で、監校を引き受けた前長湍郡守の蔡申錫は、鄭夢周の弟子にして世宗の世子賓客を経験した權遇(一三六三—一四一九)の外孫である。字を書いた槐山郡守の朴秉德についての記録は見られない。

一方、『杜律虞註』の覆刻を請うた具致寬(一四〇六—一四七〇)は、世祖代に佐翼功臣三等に策勲、吏曹參判に昇進して綾城府院君に奉ぜられた人物で、右議政を経て領議政にもなった。具は『杜律虞註』の

板刻が完了して間もない一四七〇（成宗一）年九月に没す。跋文を記した金紐（一四三六―一四九〇）は、藝文館直提學として『世祖實錄』と『睿宗實錄』の編纂、および『經國大典』の讎校に参加した人物である。

2. 『杜律虞註』の構成

『杜律虞註』は二巻一冊で構成され、杜甫の七言律詩が「分類」式に編成されている。分門と作品数は次のとおり。

上巻（13門 69首）

紀行（2首）、述懐（8首）、懷古（6首）、將相（5首）、宮殿（3首）、省宇（3首）、居室（8首）、題人屋壁（2首）、宗族（3首）、隱逸（3首）、釋老（2首）、寺觀（3首）、四時（21首）

下巻（19門 82首）

節序（12首）、晝夜（2首）、天文（4首）、地理（3首）、樓閣（7首）、眺望（2首）、亭榭（2首）、果實（2首）、舟楫（2首）、橋梁（1首）、燕飲（2首）、音樂（1首）、禽獸（3首）、蟲類（1首）、簡寄（17首）、尋訪（5首）、酬寄（3首）、送別（12首）、雜賦（1首）

ところで、上の分類は實のところ徐居仁編次・黃鶴補註『集千家註分類杜工部詩』の分門に従ったものである。分門と分門の配列順序が『集千家註分類杜工部詩』のほとんどと一致するだけでなく、収録した詩の順序も『集千家註分類杜工部詩』の順序をほぼそのまま踏襲し

たためである。つまり、虞集の『杜律虞註』は『集千家註分類杜工部詩』から七言律詩の一部を選別し、ここに新たに註解を加えたものと分かる。

（表1）『杜律虞註』と『集千家註分類杜工部詩』の目次（『集千家註』分門の数字は収録順序）

杜律虞註		集千家註分類杜工部詩		備考
卷上	杜律虞註	作成時期・場所 （黃鶴補註）	集千家註分類杜工部詩	
紀行	恨別 曉發公安	乾元二年冬成都 大曆三年秋	卷1 紀行上 卷2 紀行下―2 ―14	『虞註』未収録
述懐	聞官軍收河南河北 江上值水 撥悶	廣德元年 寶應元年春 永泰元年在忠渝	卷3 述懐下―9 ―21 ―22	『虞註』未収録
	愁	大曆元年夔州	卷3 述懐下―24	
	即事	大曆二年九月	卷3 述懐下―29	
	峡中覽物	大曆元年夏在夔	卷3 述懐下―30	
	暮歸	大曆二年夔州	卷3 述懐下―43	
	遣悶戲呈路十九曹長		卷3 述懐下―46	
懷古	詠懷古跡五首	大曆元年至夔州後	卷3 懷古―7 詠懷古跡三首 卷6 懷古―10 詠懷古跡二首	『虞註』未収録 『虞註』分類目變更
蜀相		上元元年	卷6 懷古―11	

簡吳郎司直	赤甲	江村	野老	狂夫	卜居	堂成	居室				省字			宮殿		將相			
大曆二年	大曆二年春	上元元年夏	上元元年初秋	上元元年夏	上元元年	上元元年三月				茅舍	院中晚晴懷西郭	宿府	題省中院壁	宣政殿退朝晚出 左掖	紫宸殿退朝口號	奉和賈至舍人早 朝大明宮	諸將（五首）	永泰元年秋在雲 安	
卷7 居室下—25	卷7 居室下—19	卷7 居室下—5	卷7 居室下—4	卷7 居室下—3	卷7 居室下—2	卷7 居室下—1	卷6 居室上	卷6 陵廟	卷6 省字—6	卷6 省字—5	卷6 省字—2	卷6 宮詞	卷6 宮殿—7	卷6 宮殿—6	卷6 宮殿—5	卷5 軍旅	卷5 將帥	卷5 邊塞	卷4 時事上
							『虞註』未收錄	收錄	『虞註』「懷古」			『虞註』未收錄			『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄

四時			寺觀		釋老		隱逸							家族				屋壁	題人	
卽事	玉臺觀	暮登西安寺鐘樓 寄裴十迪	閣	陪城縣香積寺官 旻上人	因許八奉寄江寧 陽時	南隣	題張氏隱居	覃山人隱居						舍弟觀赴藍田取 妻子到江陵喜寄 三首				崔氏東山草堂	題柏學士茅屋	又呈吳郎
大曆二年暮春	廣德二年春	永泰元年在溪上	廣德元年春	乾元元年	大曆二年冬起岳	上元元年	開元二十四年後 與高李遊齊趙時	大曆二年						大曆二年冬				乾元元年	大曆二年	大曆二年
卷10 四時—春19	卷9 寺觀—17	卷9 寺觀—15	卷9 寺觀—14	卷9 釋老—12	卷9 釋老—11	卷7 隣里—2	卷9 隱逸—5	卷9 隱逸—3	卷9 仙道	卷8 婚姻	卷8 外族	卷8 世胄	卷8 皇族	卷7 田圃	卷8 家族—15	卷7 題人屋壁	卷7 題人屋壁	卷7 題人屋壁	卷7 題人屋壁	卷7 隣里—4
						變史	『虞註』分類目		『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄	『虞註』未收錄					變史

卷下	暮春	大曆元年初遷夔州時	卷10四時—春20	
	曲江二首	乾元元年為拾遺在京師	卷11節序—17	
	曲江對酒	乾元元年為拾遺在京師	卷11節序—18	
	曲江值雨	乾元元年為拾遺在京師時	卷11節序—19	
	多病執熱奉懷李尚書之芳	大曆三年四月	卷10四時—夏5	
	仍	元年初到華州時	卷10四時—秋3	
	秋興八首	大曆元年夔州	卷10四時—秋9	
	登高	廣德元年	卷10四時—秋10	
	秋盡	寶應元年秋	卷10四時—秋18	
	十二月一日三首	永泰元年秋至雲安	卷10四時—冬8	
節序	立春	大曆元年在雲安	卷11節序—2	
	人日	大曆三年	卷11節序—7	『分類』2首(第2首)
	小寒食舟中作	大曆五年	卷11節序—11	
	九日二首	大曆二年在夔州	卷11節序—28	『分類』5首(第1首)
	九日藍田崔氏莊	廣德元年	卷11節序—33	
小至	大曆元年	卷11節序—36		

樓閣	至日遺興奉寄北省舊閣老兩院故人二首	乾元元年	卷11節序—37	
	冬至	大曆二年時在瀘西	卷11節序—38	
	至後	廣德二年冬在嚴武幕中	卷10四時—冬6	『虞註』分類目變吏
	臘日	至德二載扈從還京師時	卷11節序—39	
	晝夜	大曆二年二月夔州	卷11夢—3	『虞註』分類目變吏
	夜	大曆元年夔州	卷11晝夜—11	
天文	江雨有懷鄭典設	大曆二年春	卷11夢	『虞註』「晝夜」收錄
	雨不絕	廣德二年在嚴公幕中	卷12雨雪—13	『虞註』未收錄
	白帝	大曆元年秋	卷12雨雪—14	
	返照	大曆二年	卷12雨雪—21	
地理	望嶽	乾元元年赴華州司功時	卷12雲疊	『虞註』未收錄
	黃草	廣德元年	卷13山嶽—1	
	灩澦	大曆二年	卷13都邑—10	『分類』江河—都邑順
	白帝城最高樓	大曆元年到夔時	卷13江河—8	
	江陵節度使陽城郡王新樓成王請嚴侍御判官賦七字句同作	大曆三年夏	卷14樓閣—9	
	嚴侍御判官賦七字句同作	大曆三年夏	卷14樓閣—11	

音樂	吹笛	大曆元年	卷16 器用	『虞註』未收錄
			卷16 音樂—4	『虞註』未收錄
			卷16 書畫	『虞註』未收錄
			卷16 文章	『虞註』未收錄
	鄭駙馬宅宴洞中	天寶四載	卷15 燕飲—8	『虞註』未收錄
燕飲	史飲	乾元元年在諫省時	卷11 節序—20	『虞註』分類目變更
	曲江陪鄭八丈南			
	簡李公			
橋梁	陪十七司馬皂江上觀造竹橋即日成往來之人免冬寒入水聊題短作	上元二年冬在蜀州	卷15 橋梁—1	
	城西陂泛舟	天寶十三載	卷15 舟楫—7	
舟楫	進艇	上元二年	卷15 舟楫—6	『虞註』未收錄
			卷15 池沼	
	野人送朱櫻	寶應元年在成都	卷15 果實—5	
果實	題桃樹	廣德二年自閬州歸成都時	卷15 果實—5	『虞註』未收錄
			卷15 園林	
			卷14 亭樹—7	
亭樹	題鄭縣亭子	乾元元年赴華州司功時	卷14 亭樹—4	
	滕王亭子	廣德二年春	卷14 眺望—9	
眺望	望野	寶應元年在成都	卷14 眺望—8	
	野望	往射洪作	卷14 樓閣—22	
	閣夜	大曆元年	卷14 樓閣—20	
	登樓	廣德二年	卷14 樓閣—18	
	府水樓兩首	大曆元年在夔州	卷14 樓閣—12	
	又作此奉衛王	大曆三年夏		

禽獸	見王監兵馬使說近山有白黑二鷹羅者久取竟未能得王以毛骨有異他鷹恐臘後春生鷲飛避媛勁翻思秋之甚渺不可見請余賦詩二首	大曆五年潭州	卷17 鳥—14	『虞註』未收錄
蟲類	見螢火	大曆二年	卷17 蟲—2	『虞註』未收錄
			卷17 魚	『虞註』未收錄
			卷18 花	『虞註』未收錄
			卷18 草	『虞註』未收錄
			卷18 竹	『虞註』未收錄
			卷18 木	『虞註』未收錄
			卷19 投贈	『虞註』未收錄
			卷19 簡寄上	『虞註』未收錄
			卷20 簡寄中	『虞註』未收錄
			卷21 簡寄下—2	『虞註』未收錄
	將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首	廣德二年自閬州歸成都作		
	奉侍嚴大夫	寶應元年	卷21 簡寄下—4	
	贈獻納起居田舍人澄	天寶十三載	卷21 簡寄下—8	
	奉寄高常侍	永泰元年正月在成都	卷21 簡寄下—9	

酬寄		尋訪																													
奉寄章十侍御時 初罷梓州刺史東 川留後將復赴朝 廷	廣德二年	卷21 簡寄下—11		將赴荆南寄別李 劍州弟	廣德二年春	卷21 簡寄下—18		奉寄別馬巴州	上元二年	卷21 簡寄下—19		贈韋七贊善	潭州作大曆五年	卷21 簡寄下—26		崔評事弟許相迎 不到應虞老夫見 泥雨怯出必愆佳 期走筆戲簡	大曆二年	卷21 簡寄下—27		贈田九判官梁丘 寄常徵君	天寶十四載	卷21 簡寄下—30		寄杜位	大曆元年夏	卷21 簡寄下—40		所思	成都作上元二年 赴青城時	卷21 懷舊—12	『虞註』分類目 變更
有客	上元元年在草堂	卷22 尋訪—4		客室	上元二年	卷22 尋訪—5		嚴中丞枉駕見過	寶應元年權舍兩 川都節制時	卷22 尋訪—6		嚴公仲夏枉駕草 堂携酒饌得寒字	寶應元年五月	卷22 尋訪—7		王十七侍御掄許 携酒至草堂奉寄 此詩便請激高 三十五使君同到	上元二年冬	卷22 尋訪—8		奉酬嚴公寄題野 亭之作	寶應元年	卷22 酬答—2		酬郭十五判官受	大曆四年	卷22 酬答—8					

送別																																											
和裴迪登蜀州東 亭送客逢早梅相 憶見寄	上元元年冬在成 都	卷18 花—4		季夏送鄉弟韶陪 黃門從叔朝謁	大曆元年	卷22 送別上		章梓州橘亭餞成 都寶少尹得涼字	廣德元年秋	卷23 送別下—20		奉送蜀州栢二別 駕將中丞命赴江 陵起居衛尚書大 夫人因示從弟行 軍司馬位	大曆元年歲晚	卷23 送別下—22		又送辛員外	廣德元年春梓州	卷23 送別下—25		送路六侍御入朝	廣德元年	卷23 送別下—30		送寺八秘書赴相 公墓	大曆二年七月	卷23 送別下—37		送王十五判官扶 侍還黔中得開字	廣德元年	卷23 送別下—38		送鄭十八虔貶台 州司戶參軍傷其 臨老陷賊之故關 爲面別情見于詩 匱贊	大曆三年秋晚	卷23 送別下—59		送韓十四江東省 觀	上元二年在成都	卷23 送別下—62		長沙送李十一銜	大曆五年秋	卷23 送別下—63	

於是取杜之七言律詩，考其歲月，本其事跡，倣朱子之傳註以註釋之，使杜之心，粲然明著，與三百篇相望。

『杜律虞註』は朱熹の『詩集傳』と『楚辭』の例に従って杜詩に註解を付し、杜甫の心情を粲然と表した。その結果、杜詩は序文の作成者全員の評價が一致するように、『詩經』三百篇の詩と比肩するものとなった。であれば、『杜律虞註』はどのような面で朱熹の註解方式を模したのだろうか。以下、朱熹の『詩集傳』と『杜律虞註』それぞれの註解方式を簡単に比較し、さらに『杜律虞註』註解の特徴について検証してみたい。

朱熹は、淳熙四（一一八三）年冬十月戊子に作成した「詩經集傳序」で問答形式を採用して『詩經』の大義を説明した。すなわち、朱熹は、1) 詩を詠む理由「詩何爲而作也」、2) 詩が教えとなる理由「其所以教者何也」、3) 國風・雅・頌の體が同じでない理由「國風雅頌之體、其不同若是何也」、4) 詩を學ぶ方法「其學之也當奈何」、といった質問を或者の質問の體で設け、これに答える形式で『詩經』の主要問題について自身の意見を披瀝した。これらの問題は、朱熹が『詩經』の註解を通して發現させようとした『詩經』のテーマと関係のあるものと言えよう。

『詩集傳』の例として「關雎」篇第一章を挙げれば次のとおり。

關關雎「七余反」鳩，在河之洲。窈「烏了反」窕「徒了反」淑女，君子好逑「音求」

興也。關關，雌雄相應之和聲也。雎鳩，水鳥，一名王雎。狀類鳧鷖，今江淮間有之。生有定偶而不相亂，偶常竝遊而不相狎，故『毛傳』以爲摯而有別，『列女傳』以爲人未嘗見其乘居而匹處者，蓋其性然也。河，北方流水之通名。洲，水中可居之地也。窈窕，幽閒之意。淑，善也。女者，未嫁之稱，蓋指文王之妃大姒爲處子時而言也。君子則指文王也。好，亦善也。述，匹也。『毛傳』之摯字，與至通，言其情意深至也。○興者，先言他物，以引起所詠之詞也。周之文王，生有聖德，又得聖女姒氏，以爲之配，宮中之人，於其始至，見其有幽閒貞靜之德，故作是詩，言「彼關關然之雎鳩，則相與和鳴於河洲之上矣，此窈窕之淑女，則豈非君子之善匹乎？」言其相與和樂而恭敬，亦若雎鳩之情摯而有別也。後凡言興者，其文意皆放此云。漢匡衡曰……窈窕淑女，君子好逑，言能致其貞淑，不貳其操，情欲之感，無介乎容儀，宴私之意，不形乎動靜，夫然後，可以配至尊而爲宗廟主，此綱紀之首，王教之端也。可謂善說詩矣。

朱熹は「詩經集傳序」で「章句を以て綱とし、訓詁を以て紀とす」「章句以綱之、訓詁以紀之」とするようになり、毎篇の詩を章句に分け、章ごとに註釋を加えている。まず、經文の難讀字に音註を付した。そして註釋は、大きく圈内註と圏外註に區分する。圈内註では、まず「興也」として賦比興の詩體を判定した。續いて「關關」から「言其情意深至也」までは難解な語彙・典故・地名などを註解している。

圈内註が字の訓詁に關するものであれば、圏外註は詩の意味に關す

る内容が主である。「興者、先言他物、以引起所詠之詞也。」は、『詩集傳』において「興」の概念がまずはじめに現れた箇所であるため、これについて説明したものである。續いて「周之文王」から「故作是詩」までは詩を書くようになった理由を、具體的事實を擧げて敘述する。その後、「言」以下「彼關關然之雉鳩」から「豈非君子之善匹乎」は簡潔な原詩の言語を敷衍して詩の意を明瞭にしようとした。そして「言」以下「其相與和樂而恭敬」から「其文意皆放此云」は詩のテーマを再確定しつつ「興」の概念が詩にどう適用されたのか確認している。再度、漢・匡衡の言を引用して詩の大意を解き直し、各章句への註解を終えた後に「關雎三章、一章四句、二章八句」のように章句の構成を明らかにし、追って、必要なものには詩の意義・教訓などに對し内容を追記した。

關雎	詩集傳
關關雉鳩、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑。	彼關關然之雉鳩、則相與和鳴於河洲之上矣、此窈窕之淑女、則豈非君子之善匹乎？言其相與和樂而恭敬、亦若雉鳩之情摯而有別也

『詩集傳』では、「關雎」篇について、周の文王が聖女嬭氏を王妃に迎える際、宮中の者が文王妃の幽閑貞靜な徳を目にし、この詩を著したものとす。次に、詩の本文を次のとおり註解する。「關關」は「關關然」を解釋し、擬聲語であるとした。「在河之洲」は「則相與和鳴於河洲之上矣」であると敷衍する。つまり、雉鳩が單に「河之洲」にいるものではなく、「相與和鳴」しながら「河之洲」にいるものであ

ると敷衍することで、詩人が興をおこした具體的な理由を明らかにすると同時に、詩の主題―教訓を鮮明に示す。そして、「窈窕淑女」は「此窈窕之淑女」であると解き、「淑女」とは一般的な女性でなく特定の人物を指す語であると明言した。「君子好逑」は「則豈非君子之善匹乎」と解いて讚美の意を更に浮かび上がらせている。要するに、『詩集傳』は、1) 詩人が言わんとする内容を鮮明にし、2) 主題―教訓を浮かび上がらせ、3) 賦比興など詩體の判定理由を明らかにした。詩が興である場合は起興の過程を、比であれば比喩の元觀念と補助觀念を、賦ならば詩の詠う事實をそれぞれ説明する。以上は、朱熹が「詩經集傳序」で言及した『詩經』の主要問題とも一致する。

『杜律虞註』は、乾元二年（七五九）冬に杜甫が官職を捨てて成都へ行く道中で詠んだと伝えられる「恨別」に始まる。正統八年（一四四三）重刻本の序文を記した林靖は、『虞註』が「恨別」一首を同書の最初の詩と見なしたのは、この詩の五十六字が多くて含意を持ち、忠君愛親の情を表出して意思の外側に溢れているためだとした。⁷⁾「恨別」についての『杜律虞註』の註解を原詩とともに以下にて紹介する。

洛城一別四千里，胡騎長驅五六年。
草木變衰行劍外，兵戈阻絕老江邊。
思家步月清宵立，憶弟看雲白日眠。
聞道河陽近乘勝，司徒急爲破幽燕。

洛城、即洛陽，在河南府。胡騎、指祿山之亂。劍外、蜀劍閣之外。河陽、河南洛陽也。是年十月，司徒李光弼，敗史思明於河陽。

幽燕，史思明窟穴也。○公棄官入蜀，未得所依，故以別爲恨也。言在蜀去洛，如此之遠，胡人亂華，又如此之久，當草木搖落之時，行於劔閣之外，遂爲兵戈阻隔而老於錦江之上也。思家之際，見月則不寐而立，憶弟之際，見雲則不坐而眠，其立其臥，反晝夜之常，所以見其恨別之深也。末因聞李光弼之勝而望其奮銳摧鋒，掃穴犁庭，則幽燕平而洛城，可歸矣。

『杜律虞註』の註解は、詩本文が終わわり、續いて『詩集傳』と同じく圈内註と圏外註とに分けて施される。音註は別途付したりせず、賦比興の詩體の判定は一部の作品に限定された。圈内註の「洛城」から「史思明窟穴也」までは難解な語彙・典故・地名などを、圏外註では『詩集傳』と同様に詩を書くに至った動機、詩句の意味を敷衍して説明する。つまり、「公棄官入蜀，未得所依，故以別爲恨也」は詩を著した理由であり、「言」以下「在蜀去洛」から「可歸矣」までは詩の意味を敷衍して説明しているのである。

『杜律虞註』の圏外註で最も大きな特徴は、『詩集傳』のように簡潔な詩語を敷衍して意味を明らかにするにとどまらず、詩人の言を通して詩人の心を読み解こうとした点であろう。この点は既に『杜律虞註』の多くの序文で指摘済みのところである。

陽士奇「杜律虞註序」

伯生學廣而才高，味杜之言，究杜之心，盖得之深矣。

林靖「書杜律虞註序後」

今味太叟虞公所註，復能發先正之所未發，俾杜公子美之心，得以明諸日月，悠久於宇宙矣。

胡澐「杜律虞註序」

於是取杜之七言律詩，考其歲月，本其事跡，倣朱子之傳註以註釋之，使杜之心，粲然明著，與三百篇相望。

つまり、『杜律虞註』は詩想の流れに従い、詩語で表現された杜甫の心理を明らかにしようとする。「恨別」詩を例として以下に再掲しよう。

恨別	杜律虞註
洛城一別四千里， 胡騎長驅五六年。 草木變衰行劔外， 兵戈阻絕老江邊。 思家步月清宵立， 憶弟看雲白日眠。 聞道河陽近乘勝， 司徒急爲破幽燕。	公棄官入蜀，未得所依，故以別爲恨也。言，在蜀去洛，如此之遠，胡人亂華，又如此之久，當草木搖落之時，行於劔閣之外，遂爲兵戈阻隔而老於錦江之上也。思家之際，見月則不寐而立，憶弟之際，見雲則不坐而眠，其立其臥，反晝夜之常，所以見其恨別之深也。末因聞李光弼之勝而望其奮銳摧鋒，掃穴犁庭，則幽燕平而洛城可歸矣。

『杜律虞註』はこの詩を杜甫が官職を捨てて成都へ戻るもまだ寄る邊のないときに作ったものとし、『詩集傳』と同じく詩が書かれた具體的な時間と空間、そして詩人の状況をまず示した。續いて詩本文に依據して詩人の立場・状況と當時の社會的現實（第一―二句）、時間

と歴史の流れの前にどうすることもできない無氣力さ(第二―四句)、詩人の目に映る情景とそれにより増幅する詩人の感情(第五―六句)、問題解決への期待感(第七―八句)、といったことを敘述した。つまり、詩句を追って意味を敷衍するというよりは、詩想の流れに沿って詩人の心理を把握しようとしたことになる。

蜀は洛陽から斯くも遠く離れており、胡人の亂華もまた同じく久しい。もはや草木が揺落する今時に劔閣郊外へ至るも、我は戰亂に妨げられて錦江で老いゆく身となった。斯くして深き恨別に、晝夜なく郷里の家を思うときは月を望んで眠れず徘徊し、弟を追憶するときは雲を望み見ては、立ったまままどろんでいる。ところで、李光弼の勝ち戦の知らせを伝え聞いた。その勝利で胡人が掃蕩され幽燕地方が平定し、洛陽へ戻れるようになることを望むばかりなのだ。

なお、これは逆の過程も成立する。つまり、詩人が自身の心と状況をありのまま適切に表現するためにこうした表現を使用した場合である。『杜律虞註』は、このような措字の理由も具體的に説明する。以下に一例を挙げる。

聞官軍收河南河北

即從巴峽穿巫峽，便下襄陽向洛陽。

即從・便下、四字、見其歸速之意。

愁

江草日日喚愁生，巫峽冷冷非世情。

今江上之草，日長而公未可歸，故云，喚愁生。

寄常徵君

白水青山空復春，徵君晚節傍風塵

首言徵君，本在白水青山之間隱居，而今年老，乃因兵戈，奔走在外，故云，空復春，也。

第一の例は、官軍が河南と河北を修復したという知らせを聞いて一刻も早く長安へ戻ろうとした、一詩人の心が「即從」・「便下」の四字に込められているものと讀まれた。逆に、詩人はそうした自身の心をこの四文字に込めて表現する。第二の例は、時が長く過ぎるほど長安へ戻れず江上の草木を見てさえも郷愁が湧き起るので「喚愁生」と言われた。しかし反對に、江上の草木は長安へ長らく戻れぬ詩人の郷愁を呼び起こす媒體として活用されている。第三の例は、徵君が白水青山のあいだに隱居したかもはや年老いたのに兵火に遭って他郷へ避難したことから「空復春」とされた。これも逆に、白水青山に再び訪れた春は、年老いた上に兵火で他郷へ避難している詩人にとってただ虚しくやってくるのである。

上で言及したように、『杜律虞註』は、『詩集傳』とは異なり音註を別途付けない。『詩集傳』は難讀字に音註を付しただけでなく、上古音復元のため音註に吳械(一一〇〇頃〜一一五四)の叶韻説を受容もした。吳械の叶韻説は、清代の音韻學によって否定されたけれども、朱熹が『詩集傳』の音註において叶韻説を支持して以降、後代に持續

的に影響を與えた。特に朱子學者らの間ではこれが上古音の體系として尊信もされた。⁽⁸⁾しかし、『杜律虞註』は詩の構造分析を通じた詩人の心理分析に主眼を置いたため、音韻については別途、註をつけなかつたらしい。

『杜律虞註』は詩の構成と構造の様相を分析する一方、特殊な句法や用法については別途註釋を付さなかつた。幾つかの例を挙げると以下のとおりである。

曉發公安

北城擊柝復欲罷，東方明星亦不遲。

此詩起聯對偶而次聯不對者，唐人謂之偷春體。

堂成

旁人錯比揚雄宅，懶惰無心作解嘲

末以楊子雲自比，用其事而反其辭者，翻案法也。翻案則語不腐而意新，凡用古事，當以此爲法，可謂化臭腐而爲新奇也。

崔評事弟許相迎不到應慮老夫見泥雨怯出必愆佳期走筆戲簡

江閣邀賓許馬迎，午時起坐自天明

第二句，言自天明起坐，直至中午，不見遣馬來迎，倒句法也。

一つめの例は、起聯では對偶し領聯では對偶しない偷春體、二つめは古事を記すも意味を反對にした翻案法、語句を倒置した倒句法につ

いて別途説明したものである。

一方、『杜律虞註』では『詩集傳』と異なり賦比興の詩體の判定は一部の作品に限定された。これについては章を改めて論じたい。

4. 『杜律虞註』の興説

『杜律虞註』は、一部の作品に限り賦比興の詩體を判定した。これは『詩集傳』の賦比興説とどのような關係があるのだろうか。以下、興説を中心に『杜律虞註』の詩體についての説を検討してみたい。

『詩集傳』は詩篇ごとの註釋を、賦比興の詩體を判定することに始まる。白川先生は朱熹の興説を次のように整理されたことがある。⁽⁹⁾

1. 託興の意を下句で説破しているものは興體である。
2. 託興の辭は多く實事實景、詩人の見るところによって興を發したものであり、架空的にある場合や状景を設定した虚設の句は、全く比況のためのものであるから比である。
3. 取義にしてかつ上下形式の對應するものは興である。
4. 不取義なるも上下形式の對應するものは興である。

1と2について、「關雎」の例をもって言えば、「彼關關然之雎鳩，則相與和鳴於河洲之上矣，此窈窕之淑女，則豈非君子之善匹乎？言其相與和樂而恭敬，亦若雎鳩之情摯而有別也。」とする。雎鳩の「情摯而有別」という習性によって「和樂而恭敬」な淑女が惹起されるもので、起興の辭はもはや主題と關連がない。

朱熹は興を論じつつ、比をとともに論じた場合が多いが、興と比には説破と不説破の區別がある。そして、興體における起興の辭は「詩之興、全無巴鼻」（『朱子語類』卷八十）とするように、主文との關係が説破によってはじめて明らかとなる。「關雎」の二句は「窈窕」二句によってようやく起興の關係を知ることができる。「麟之趾」もまた同様である。「螽斯」は比況するところが明らかで、實事を説破することがないため比體になる。比顯興隱の評價が出るようになったのである。朱熹は主に説破・不説破の基準で興と比を明確に區別し、これを『詩經』全體に適用した。

3と4について、王風「揚之水」の例を挙げると、「揚之水，不流束薪。彼其之子，不與我戍申。」について朱熹は、興だと判定しつつ「興取之不二字，如小星之例」としている。朱熹は、召南「小星」の「嘒彼小星，三五在東。肅肅宵征，夙夜在公。寔命不同。」を興と判定し、その理由を「因所見以起興，其於義無所取，特取在東在公兩字之相應耳。」とした。託興の意を下句で説破しただけでなく、不取義、上下形式の對應とする一格もまた興體と見たのである。これは、取義、上下形式の對應についても變わらない。

以上の興説は、以下のように改めて要約できよう。

1. 前辭が有義意的に主題に關與する場合 この場合には主文において前辭の比喩性が説破される。
2. 前辭が無義意的に主題を誘起する場合 この場合はリズム・語法の對應をとる。

さらに、朱熹は興體の詩について、ただ興である場合とともに、「興而比」「比而興」「賦而興」「賦而興而比」「賦其事以起興」などを挙げ

る。『杜律虞註』は、『詩集傳』を模倣して註解を付けたとする。そうであれば、賦比興の詩體についての説も『詩集傳』の説によったものなのだろうか。上で言及したように、『杜律虞註』は『詩集傳』のように全ての作品に對して詩體を判定しはしなかった。『杜律虞註』は「愁」「暮歸」「狂夫」「野老」「秋興八首」のうち、第一首と第五首については「興」とし、「進艇」については「興而比」とする。

「愁」は、杜甫が晩年に夔州で書いた詩で、沈鬱でうら寂しい心境を表現した。『杜律虞註』はこの詩が興體に該當すると判断している。詩を以下に挙げよう。

江草日日喚愁生	江草は日ごとに愁心を呼び起こし
巫峽冷冷非世情	巫峽は冷冷として世情にあらず
盤渦鸞浴底心性	盤渦に白鸞が沐浴せしは何の心性か
獨樹花發自分明	獨樹に花咲き自ずから明らかかなり
十年戎馬暗南國	十年戎馬で南國は暗鬱
異域賓客老孤城	異域の賓客は孤城にて老ゆ
渭水秦山得見否	渭水と秦山を再び見られようか
人今罷病虎縱橫	人はいま罷病し、虎は縱横す

律詩は、たいてい八句四聯で成り立っており、その中で頷聯と頸聯は必ず對仗を守らなければならない。それで、「景」と「情」をどう組織するかというのが全體の詩の骨格に重大な影響を及ぼす¹⁰。上の詩は、頷聯では景物〔季節ごとの景色やその移り変わり〕を描寫し、頸聯では情思を敘述したものと見られる。しかし、全體的に見てこの詩は、前四句と後四句に分けることができ、首聯と頷聯では景物を描寫し、頸聯と尾聯では情思を敘述した、というにもなる。

『杜律虞註』も詩を前四句と後四句に大別し、註釋の最後に「前四句、愁之端、興也。後四句、愁之實、賦也。」と解釋した。すなわち、前の四句は愁心〔郷愁〕を呼び起こした端緒であるため興だとしたのである。『虞註』はこれを再び敷衍して「草喚愁生、水無世情、鶯浴花開、自適其意、此四者、皆所以感觸公之愁思。」としている。杜甫自身は十年あまりの長い戦争で故郷へ戻れないまま客地で年老いていく。けれども、これと關係なく草は愁心を呼び起こし、川の水は世の人情がなく、白鷺は水に遊び、花は華やかに咲き亂れて自ら喜びを享受する。この四つを見て杜甫はふと愁心が呼び覺まされた。

ところで、『虞註』が「前四句は愁の端にして興であり、後四句は愁の實にして賦である」としたのは、朱熹が『詩集傳』で主張した興説と關連のあるものと見る。上で言及したように、朱熹は託興の意を下句で説破しているものを興體とし、託興の辭は多くが實事實景、詩人の見るところによって興を發したものとした。また、比況するところが明らかで、實事の説破が無ければ比體だともした。上の詩もやはり前四句の草・水・鷺・花などの實事實景は愁心を比喻するのではな

く、詩人の愁心と直接關係あるものでもない。ただ、詩人はこの四つを見て、ふと「愁」の感情が呼び起こされ、その「愁」の事實を以下にて敘述した。すなわち前四句と主文たる後四句の關係が説破によってようやく明らかになったのである。『虞註』はこのような形式の詩を「興」と判定したのだった。

「暮歸」もまた、杜甫が晩年に夔州で作った詩である。詩は以下のとおり。

霜黃碧梧白鶴棲 霜の黄色い碧梧桐に白鶴がとどまり

城上擊折復烏啼 城上に擊折するもまた烏啼く

客子入門月皎皎 客子が門に入り月の光は皎皎と

誰家搗練風淒淒 誰かからか聞こえるきぬたの音、風は淒淒と

淒と

南度桂水關舟楫 南へと桂水越えんとするも舟楫無く

北歸秦川多鼓鞞 北へと秦川戻らんに鼓鞞多し

年過半百不稱意 齡半百過ぎるほど意のままになること無く

明日看雲還杖藜 明日に雲を見、また杖藜とらん

『虞註』によると、この詩は杜甫が仕事に行っていたが、十全にできず、夕方に家へ戻る際、歸路での景觀と家に入る時の景觀を見て起興したものとなる。詩は上の「愁」と同じく景物を描寫した前四句と情思を敘述した後四句に分かれる。冷たい碧梧にとどまる白鶴、靜寂を破る擊折の音と淒涼とした烏の啼き聲、城の中に入るや自身を寂

しく照らず皎皎とした月の光、どこからか聞こえてくるきぬたの音と肌寒い風。こうした景物を見て詩人はふとうら寂しい感情に襲われた。

「狂夫」は上元元年の夏、成都の草堂で書かれたものである。

萬里橋西一草堂 萬里橋の西に草堂ひとつ

百花潭水即滄浪 百花潭の水はすなわち滄浪の水

風含翠篠娟娟靜 風含む翠篠は娟娟と静けき

雨裊紅蕖冉冉香 雨に濕る紅蕖は冉冉と香しく

厚祿故人書斷絶 厚祿の故人に書信が途絶え

恒飢稚子色淒涼 恒にひもじき幼な子は顔色、淒涼

欲填溝壑唯疎放 溝壑に填せんとするのは、ただに疎放

自笑狂夫老更狂 狂夫が老いて、より狂い、自ら可笑し

『虞註』では、この詩は本来、草堂によって起興し詠まれたものとされる。「此詩、本因草堂起興而作」。上の四句の情景を見て杜甫は自嘲的心境を書き起こした。

「野老」も、杜甫が成都の草堂で詠んだものである。

野老籬前江岸回 野老の垣根の前に丘陵がめぐり

柴門不正逐江開 柴門は斜めに、江に沿って開かる

漁人網集澄潭下 漁人は澄潭で網をしまい

賈客船隨返照來 賈客の船は返照にしたがい來たる

長路關心悲劒閣 長路の關心は劒閣において悲しく

片雲何意傍琴臺 片雲のごときありさまにどうして琴臺のそば

を思おうか

王師未報收東郡 王師が東郡を取り戻したとの知らせ無く

城闕秋生畫角哀 城闕に秋の訪れ、畫角が哀れなり

『虞註』はこの詩もまた「狂夫」と同じく草堂に因って起興し、時

節の悼みをうたったものとする。「此詩亦以草堂起興而傷時也」。草堂

の垣根と柴の戸、川の漁父と商人の船。草堂から望み見る情景は、杜

甫の哀しき心をふいに呼び起こしたのだった。

「秋興八首」も、大曆元年に夔州で詠われた。うち、第一首は以下

のとおり。

巫山巫峽氣蕭森 巫山巫峽、氣、蕭森

江間波浪兼天湧 江間の波浪は天を兼ねて湧き

塞上風雲接地陰 塞上の風雲は地に接して陰る

叢菊兩開他日淚 叢菊、兩たび開く、他日の涙

孤舟一繫故園心 孤舟 一えに繫ぐ、故園の心

寒衣處處催刀尺 寒衣處處 刀尺を催し

白帝城高急暮砧 白帝城高くして、暮砧急なり

『虞註』では、この詩が峽中の秋景を目にし、起興して作ったものとする。「此詩、因見峽中之秋景而起興」。前四句の肌寒い秋の風景は、後四句の寂寞とした心境を想起させる。しかし、前四句は寂寞とした

心境の比喩ではない。

『虞註』は、「進艇」について「興而比」と判定する。朱熹のいう「興而比」とは、上四句興體、下四句比の體であることを意味する。一章のうちに含まれている修辭を並列しているのであって、興・比の二者が關係的に現れているというのではない。¹¹⁾「進艇」は以下のとおり。

南京久客耕南畝

南京に長らく客として南畝に耕し

北望傷神臥北窗

北側を望めば心傷み北窓に臥す

晝引老妻乘小艇

晝に老妻つれ小艇に乗り

晴看稚子浴清江

晴天に稚子ら清江に沐浴するのを眺む

俱飛蛺蝶元相逐

ともに飛ぶ蛺蝶は元來互いに従い

併帶芙蓉本自雙

並び立つ芙蓉はもとより自ずから對を成す

茗飲蔗醬攜所有

茗飲蔗醬あるがままに持ち來たるに

瓷甕無謝玉爲缸

瓷甕が玉酒甕に遜色なからん

この詩は、杜甫が蜀の地方にて農業を営みひっそり住んでいたときに記したものである。頸聯について『虞註』は、互いに追い合う蝶や並んで咲く蓮華は杜甫が船で見たものと見られるけれども、實は夫婦が船に二人で乗っているのを比喩したもので、**「興而比」**だとした**「蝶之相逐、蓮之並蒂、雖若指進艇時所見、然其意實比其夫婦同舟、所謂興而比者也。」**『虞註』が**「興而比」**としたのは、後四句を念頭に置いて言ったものようである。つまり、『虞註』が「始者傷神、今則可以怡神矣。」と解釋したように、頸聯にある團樂の情景は、尾

聯の「怡神」を説破したものと見るができる。ただ、『詩集傳』の「興而比」の場合と同じく上四句興體・下四句比の體であることを意味するものではない。

『虞註』で、「興而比」はむしろ朱熹の「比而興」と似ていると言える。朱熹は「氓」篇の第三章について「比而興」と判定したことがある。下四句は上四句によって説破されるため、上四句は興となる。ところが、起興の辭である上四句のうち上二句は比體であることから興體のなかに再び比が含まれることとなる。朱熹はこれを「比而興」と定義した。¹²⁾『虞註』では、「進艇」の頸聯が尾聯の「怡神」を説破するのと同時に夫婦が船に同乗しているのを比喩したものであるため、「興而比」と判定された。「氓」篇の例のように、興體のなかに比體が含まれるものではないけれども、『虞註』の「興而比」は朱熹のいう「比而興」に近いと、言えそうである。

5. 朝鮮における『杜律虞註』の受容

『杜律虞註』は、本来、私的な議論の果てに清州で初めて覆刻されたけれども、簡便である点と杜律がテーマ別に分類されていて律詩を詠む際の参考に良いという理由から、士大夫の間であまねく好まれた。明宗・宣祖朝の李滉（李退溪）はこの書を愛讀し、外出するときも離さなかったという。「杜詩四萬讀」で有名な李安訥もまた、この『虞註杜律』を熱心に讀んだ。¹³⁾ところが、朝鮮の士大夫のあいだで杜甫の夔州期の詩は一つの論争の種にもなっていたようである。

上で言及したように、『杜律虞註』において最も多くの數を占める

のは、いわゆる成都期（六十首）の詩と、夔州期（六十四首）の詩である。杜甫の詩は、大きく四つの時期に區分できる。一生にわたり絶え間なく顕著な變化を示しながら、不斷に成長していった。

1) 第一期（七一―七五五）…三十代から四十代中盤の、長安にとどまっていた時期。

2) 第二期（七五五―七五九）…四十四歳の冬、安祿山の亂で家族と流浪していた時期。詩人はむしろ内面の憂愁を詠う。

3) 第三期（七五九―七六五）…泗川成都の草堂に任んでいた時期。この時期の詩は平和で圓熟し、自然の善意に敏感。

4) 第四期（七六五―七七〇）…揚子江を下り夔州に移り住んだ時期。この時期、杜甫の詩は完成に至る。

このうち、第四期に該当する夔州期の詩は悲壯な風景のなかで最後の完成に至り、憂愁は自身のみの憂愁としてではなく、人類の憂愁として詠われたと評價される¹⁴。黄庭堅は「與王觀復書」において、この時期の杜甫の古律詩が句法を得て「簡易而大巧出焉、平淡而山高水深」とし、「文章成就、更無斧鑿痕」と高く評價した。

ところが、朱熹は杜甫の夔州期の詩について肯定的な評價を下さなかった。杜詩についての朱熹の評價は『朱子語類』卷一四〇に、次のような記録が見られる。

・古詩須看西晉以前、如樂府諸作皆佳。杜甫夔州以前詩佳、夔州

以後自出規模、不可學。〔…〕（徳明）

・杜詩初年甚精細、晚年横逆不可當、只意到處便押一箇韻、如自秦州入蜀諸詩、分明如畫、乃其少作也。〔…〕（方子佐同）

・李太白終始學選詩、所以好。杜子美詩好者亦多是效選詩、漸放手、夔州諸詩則不然也。（雉）

・人多說杜子美夔州詩好、此不可曉。夔州詩卻說得鄭重煩絮、不如他中前有一節詩好。〔…〕（雉）

・杜子美晚年詩都不可曉、呂居仁嘗言、詩字字要響、其晚年詩都啞了、不知是如何、以為好否？

要するに朱熹は、夔州以後の詩は規模の大きさをもち得なかったため、做うほどのものではないと酷評したのである。朱熹は、夔州期の詩が『文選』に収録された西晉以前の古詩の持つ詩體を守らずにいる事實を指摘したのであった¹⁵。杜甫の詩で良いものは『文選』の詩に範を取ったものであり、晩年に近づくにつれて自ら規模を持たせたが、夔州以後の詩ではそうできなかったとしている。

『杜律虞註』の愛讀者、退溪・李滉（一五〇一―一五七〇）は、このような朱熹の論評に疑問を持ち、杜甫晩年の詩について評價を保留した。その事實は、退溪が六十歳となった一五六一年に弟子の鄭惟一（一五三三―一五七六）へ書いた「答鄭子中（惟一）講目」によく表れている¹⁶。

朱子論詩、取西晉以前、論杜詩、取夔州以前、自今觀之、江左諸

人詩、固不如西晉以前、夔州以後詩、亦太橫肆郎當、大槩則然矣。然如建安諸子詩、好者極好、而不好者亦多。子美晚年詩、橫者太橫、亦間有整帖平穩者、而朱子云然、此等處吾輩見未到、不可以臆斷、且守見定言語、俟吾義理熟眼目高、然後徐議之耳。

李退溪は、子美の晩年にあたる夔州期の詩の弛緩は確かにひどいものであったけれども、時に整然かつ平穩なものもある、しかしながら朱子がこう評價した以上、性急に憶測をするよりは見る目を十分に養った後にじっくりと論じるのが良かろうとして、判断を保留したのである。

朝鮮後期の西浦・金萬重（一六三七—一六九二）は、『西浦漫筆』で杜詩について相應の評價を提示している。

「……詩道至少陵而大成、古今推以爲大家、無異論、李固不得與也。然物到極盛、便有衰意、邵子曰……看花須看未開時」。李如花之始開、杜如盡開、夔後則不無離披意。（第九十七則）

「……竊謂自古文章大家、只有四人、司馬遷・韓愈之文、屈平之賦、杜甫之詩、是也。皆是具四時之氣焉。不然、不足爲大家。『史記』之「酷吏・平準」、昌黎之誌銘、『楚辭』之「九章・天問」、子美之夔後、皆秋冬之霜雪、謂之不佳、則固不可、謂之反勝於「范・蔡」・「荆・聶」・五原・序書・「離騷」・「九歌」・「出塞」・吏・別・入蜀諸詩者、吾不信也。（第一四〇則）

金萬重は、杜甫の夔州期以降の詩が全て秋霜と冬雪の氣運を持つので良くないとするのは正しくないものの、これらが『史記』の「范雎蔡澤列傳」「刺客列傳」、韓愈の五原と多くの序・書、屈原の「離騷」と「九歌」、杜甫の「出塞」と三別・三吏、および入蜀以後の多くの詩よりすぐれているとするならば、それは誤りであるとした。金萬重は李白と杜甫を比較し、李白の詩は花が咲き始めたばかりのときのようにであり、杜甫の詩は大きく開いて咲いた花のようだと評價するも、夔州以後の詩は花の散る意が無くもないと評した。要するに、朱熹のように酷評しなかったとはいえ、夔州以後の詩は哀傷と哀落の意が甚だしいので夔州以前の詩に及ばないと評したのである。

以上のケースを除けば、朝鮮時代の士大夫たちが夔州時期の詩におこなった評價は、大體が否定的である。これは、夔州期の詩に對する朱熹の否定的な評價の影響らしい。であるのに、夔州期の詩を最も多く収める『杜律虞註』が朝鮮時代後期まで士大夫の間であまねく好まれたのは、多くの序文で明らかにされたことのある、『虞註杜律』が杜詩の精神を「忠君愛國之心」「忠君愛親之情」にたずねているという點、そして律詩を制作する際の参考として便利であった點のおかげである。

胡澐「杜律虞註序」

惟杜少陵、博極群書、馳騁古今、當天寶搶攘之際、凡跋履山川、與忠君愛國之心、皆見於詩、從容於法度之中、稱雄于百世之下、

邈乎不可及已。

林靖「書杜律虞註序後」

且是詩五十六字，含蓄萬意，表其忠君愛親之情，溢於意外。

朝鮮後期には『杜律虞註』の杜詩解釋の方法への批判が現れることもあった。すなわち、姜樸（一六九〇—一七四二）は次のとおり『杜律虞註』を始めとした諸家の註釋の批判もおこなっている。

世或言虞註便覽，而余見之，亡論尋得出處來多錯，卽其用己意註解處，牽強穿鑿，瑣屑支離，愈釋而愈晦，愈詳而愈亂，徒見其勞且妄矣。而後生晚輩，不甚究察，但喜其逐句分析，無所遺闕，而謂爲詳要，酷信獨守，則其爲詩學之害，豈少哉？且不待伯生然也。
詩家自古無善註。〔…〕

多くの者が参考とするのに便利だという理由で『虞註』を愛讀するけれども、『虞註』は出所に間違いが多く、憶測で詮索した箇所も多い。そうではあるが、これについて深く考察せず、ひたすら『虞註』の逐句をして漏れなく分析した點だけを好んでその説を固守するのは詩學に害となること少なからずとした。

しかし、『杜律虞註』は朝鮮後期に至るまで士大夫の杜詩註解書として参考とされただけでなく、國家の詩風の醇化手段として活用されるまでになった。

正祖（在位一七七七—一八〇〇）は、社會政治上の安定を回復して文治で昇平の氣運を確保するや、朝鮮後期に現れた新たな詩風を「唯殺之體」と規定し、杜甫と陸游の律詩を普及させることで詩風の醇化を圖った。すなわち、一七九八年（正祖二十二）の七月には『杜律分韻』五卷（生字字本と整理字本）と『陸律分韻』三十九卷を、翌一七九九年（正祖二十三）の十二月には『杜陸千選』八卷（丁酉字本）を内賜した。¹⁹ 正祖は「羣書標記」で『杜陸千選』について以下のよう論じている。

夫子又嘗曰…光明正大，疏暢洞達，磊磊落落，無纖芥之可疑者，於唐得工部杜先生。夫子亞聖也，於人物臧否，一言重於九鼎，而其稱道杜工部乃如此者，豈非讀其詩而知其人也歟？如陸務觀，與夫子同時，而夫子尚許之以和平粹美，有中原昇平氣象，則當今之時，等古之世，教其民而化其俗，捨杜陸奚以哉？〔…〕予時讀春秋左氏傳，起感於山榛隰苓之什，歷選三百篇以後，能得三百篇之大旨者，惟杜陸其庶幾乎！²⁰

正祖は、杜甫について朱熹の人物評を引用して今日、民衆を教化し風俗を變えさせられる方法として杜甫の詩に言及する。それに、杜甫の詩に對して『詩經』の主旨を得て安祿山の亂で流浪するあいだにも忠君愛國の誠が「秋興」の多くの篇にみながっているとも評價している。²¹ この「忠君愛國の誠」は『虞註杜律』の多くの序文で杜詩のテーマとして示された「忠君愛國之心」「忠君愛親之情」の確認に他なら

ない。

テーマだけではない。『杜陸千選』はその内容の一部を『杜律虞註』から取っている。すなわち、『杜陸千選』は杜律の五言・七言の五〇〇首と陸律の五言・七言の五〇〇首で構成されているが、杜律の七言は『杜律虞註』から詩を選別している。『杜律虞註』の範囲を超える詩が無く詩の配列順序もまた『杜律虞註』が則っている『集千家註分類杜工部詩』の順序にそのまま従っているためである。「堂成」（上元元年三月）と「卜居」（上元元年）、「野老」（上元元年初秋）と「江村」（上元元年夏）、「即事」（大曆二年暮春）と「暮春」（大曆元年初遷夔州時）は『杜律虞註』と編次が替わっているが、これは『杜律虞註』のように『集千家註』の編次のとおりにはせず、黄鶴註に依據して順序を修正したものである。杜律五言の底本は知るべきがない。

終わりに

以上にて『杜律虞註』が杜詩の註解書として備える特徴について簡単に論じた。

『杜律虞註』は二巻一冊の構成で、杜甫の七言律詩を「分類」式に編成する。分類は徐居仁の編次、黄鶴補註『集千家註分類杜工部詩』の分門に従う。『杜律虞註』は『集千家註分類杜工部詩』から七言律詩の一部を選別し、これに新たに註解を加えたものである。

『杜律虞註』の註解方法は、朱熹『詩集傳』の例に範を取って圈内註と圏外註に分けて註解するものである。音註は別途付されず、賦比興の詩體の判定は一部の作品に限定される。『杜律虞註』圏外註の最

大の特徴は単に意味を疏通し伝えるに留まらず、詩人の言葉を通じてその心を読み解こうとしたことである。

『杜律虞註』の興説は、朱熹の興説と関連のあるものと見られる。朱熹は託興の意を下句で説破しているものを興體とした。託興の辭は多く實事實景であり、詩人の見るところによって興を發したものとす。また、比況するところが明らかで、實事の説破が無ければ比體だとす。『杜律虞註』もまた前四句と主文である後四句の關係が説破によつてはじめて明らかになることに對し、興だと判定した。『虞註』の「興而比」は朱熹の「比而興」と類似である。

朝鮮の士大夫たちのあいだで杜甫の夔州期の詩が論争の種の一つとなつており、一部の例を除いて夔州期の詩への評價はおおむね否定的であった。これは、夔州期の詩に對する朱熹の否定的評價と関連が深い。そうであるのに、夔州期の詩を最も多く収録する『杜律虞註』が朝鮮後期まで士大夫のあいだであまねく好まれていたのは、多くの序文で明らかにされたように『虞註杜律』が杜詩の精神を「忠君愛國之心」「忠君愛親之情」にたずねているという點と、律詩を作る參考として良いという點によるものであった。正祖は『杜陸千選』の解題で、杜甫の詩について、『詩經』の主旨を得ており、忠君愛國の誠が「秋興」の多くの篇にみなぎっていると評價する。この、忠君愛國の誠は「虞註杜律」の多くの序文で杜詩のテーマとして提示した「忠君愛國之心」「忠君愛親之情」の確認に他ならない。『杜陸千選』の杜律七言もまた、『杜律虞註』から詩を選別したものである。

注

- (1) 沈慶昊『朝鮮時代漢文學と詩經論』、一志社、一九九九、pp.342-343。
 (2) 成文濬『書杜律虞註後』、『滄浪先生文集』卷四、雜著。「余於前歲之夏、得此本於逆旅主人、其說甚新、昔所未覩、雖未必盡得作者之意、而時有說得痛快處、以爲讀杜者之不可不知也。因錄一本、以畀兒曹、既又聞人有新刊唐本虞註、因借而觀之則卷末有跋、舊本所無、乃嘉靖年間太原守濟南黃臣與山西監察御史浮山穆相重刊此書、而黃又自爲之跋者也、其畧云：「予讀『麓堂詩話』、西涯論虞註必非伯生之作、後遊都下、偶獲刻本『杜工部律詩演義』、實與虞註同、而序稱元季京口進士張性伯成者、博學早亡、鄉人悼之、得此遺稿、因相與合力刊行、余得之喜甚、欲以其書告西涯、會其卒而不果云、[….]」
- (3) 李義康『朝鮮時代流行杜詩集『杜律虞註』의 文獻學的研究』、『韓國漢文學研究』第二十八輯、韓國漢文學會、二〇〇一。
- (4) 沈慶昊『朝鮮時代漢文學と詩經論』、一志社、一九九九、p.323。
 (5) 詩自雅頌以後、正音浸微、至唐有三百篇之遺韻、而獨杜子美集大成焉、故古今宗之、然全集浩穢、未易遍覽、觀者病之、元邵菴先生虞集、采子美集中律詩若干首、就加註解、釐爲幾卷、刊行於中朝久矣、一日、坡平尹君師夏訪余、曰、「昔余爲忠清都事、綾城具相國致寬、授余以杜律虞註、且請鈔梓、余白監司安公哲孫、囑于清州牧使權君至、功未就、而安公見代、金監司良瓚繼至、則工垂訖、而余又秩滿而還、日者、權牧使以書來告斷手、且求記其始末、余非能言詩者也、惟吾子是托」余曰、律詩難於古詩、故觀人之詩者、觀乎律詩、足以知規模氣格矣、何必經年勤苦、僅一遍閱、然後爲得哉？今是集也、卷帙甚簡、而子美氣律、學不出於此、眞學詩者之指南也、雖然向微相國與方伯諸君、相與勉成、則無以廣其傳矣、其有功於詩道而嘉惠後學者、豈淺淺哉？是爲跋、時成化紀元之七年辛卯孟秋日、通訓大夫藝文館直提學、知製敎兼經筵侍講官春秋館編修官承文院參校上洛金紐夫。
- (6) 『端宗實錄』卷十四、端宗三年五月十四日。「議政府據禮曹啓啓：清州幼學李經邦、孝養二親、出告反面、如得異味必獻、少有疾病、至誠奉藥、及父歿、躬自負薪汲水、以供朝夕之奠、隣里感動、爭相助奠、又其母死、一如喪父、喪畢後仍居墓側、出告反面、無異生時[….]請竝隨才敘用。」
- (7) 雖然杜律不下數百篇、天文・地理・時序・禽蟲・舟梁・臺榭・草木之類、靡所不該、然虞太叟獨註「恨別」一首爲始者、何哉？且是詩五十六字、含蓄萬意、表其忠君愛親之情、溢於意外。
- (8) 齋藤希史「讀詩之法」—朱熹における古典の内在化」、『古典學の現在』II、文部科學省科學研究費特定領域研究「古典學の再構築」總括班、

11001、pp.100~102.

- (9) 以下、朱熹の興説については、白川靜『興の研究』、『白川靜著作集』九、平凡社、二〇〇〇、を参照。
- (10) 沈慶昊『漢詩の世界』、『文學동네』、二〇〇六、pp.55-56。
 (11) 白川靜『興の研究』、『白川靜著作集』九、平凡社、二〇〇〇、pp.256-257。
 (12) 白川靜『興の研究』、『白川靜著作集』九、平凡社、二〇〇〇、pp.256-257。
 (13) 沈慶昊『朝鮮時代漢文學と詩經論』、一志社、一九九九、p.349。
 (14) 古川幸次郎『杜甫私記』、『吉川幸次郎全集』十二、筑摩書房、一九七三、pp.4-5。
 (15) 元鍾禮『杜甫・蘇軾・朱熹詩論에 대한 比較研究』、『誠心女子大學論文集』第十七輯、一九八五。
 (16) 李滉『答鄭子中講目』、『退溪先生文集』卷之二十五書。
 (17) 金萬重原著、沈慶昊譯註『西浦漫筆』、『文學동네』、二〇一〇。
 (18) 姜樸『書虞集杜律註後』、『菊圃先生集』卷之十一跋。
 (19) 沈慶昊『朝鮮時代漢文學と詩經論』、一志社、一九九九、pp.348-349。
 (20) 正祖『杜陸千選八卷』、『弘齋全書』卷百八十二羣書標記四〇御定[四]。
 (21) 跋履山川之間、從容憲度之中、忠君愛國之誠、油然而湧發於秋興諸作、而不待夫子之筆、能帝蜀而寇魏、則杜子也。

○參考文獻

- 『杜律虞註』嘉泉博物館藏 清州覆刻本；國立中央圖書館所藏本 (S)산古 3717.63)
- 『端宗實錄』
- 姜樸『菊圃先生集』、韓國文集叢刊續七十、韓國古典翻譯院、二〇〇八。
 成文濬『滄浪先生文集』、韓國文集叢刊六十四、韓國古典翻譯院、一九八八。
 李滉『退溪先生文集』、韓國文集叢刊三十一—三十一、韓國古典翻譯院、一九八八。
 正祖『弘齋全書』、韓國文集叢刊二六二—二六七、韓國古典翻譯院、二〇〇一。
 金萬重原著、沈慶昊譯註、『西浦漫筆』、『文學동네』、二〇一〇。
 白川靜『興の研究』、『白川靜著作集』九、平凡社、二〇〇〇。
 沈慶昊『朝鮮時代漢文學と詩經論』、一志社、一九九九、pp.342-343。
 沈慶昊『漢詩の世界』、『文學동네』、二〇〇六。

元鍾禮「杜甫・蘇軾・朱熹詩論에 대한 比較研究」,『誠心女子大學論文集』
第十七輯,一九八五。

李義康「朝鮮時代 流行杜詩集『杜律廣註』의 文獻學的 研究」,『韓國漢文學
研究』第二十八輯,韓國漢文學會,二〇〇一。

齋藤希史「讀詩之法」―朱熹における古典の内在化」,『古典學の現在』II,
文部科學省科學研究費特定領域研究「古典學の再構築」總括班,
二〇〇一。

吉川幸次郎「杜甫私記」,『吉川幸次郎全集』十二,筑摩書房,一九七三。

(高麗大學校民俗文化研究院海外韓國學資料センター研究員)

